

## 表したいことや課題について創意工夫し評価・改善・表現できるものづくり

－ 体験的な学習活動を通しかかわりの中から思考力・判断力・表現力を育てる －

### 1. 図画工作・美術と技術科で共に願う豊かな学びの姿

両教科の研究テーマおよび研究構想から、幼小中一貫教育の中で特に小学校の図画工作と中学校の技術科をつなぐための豊かな学びの姿を考えると、両教科共に体験的な学習の中で表わしたいことや課題に向き合い、試行錯誤しながら構想を練ったり手順を工夫する学びであるといえる。また、そこで表現または製作されたものを評価し改善していく取り組みが次の学びにつながり、将来にわたっての学びにもつながる。そしてそれは仲間とのかかわり合いの中で自らの考えを伝え、集団の考えを発展させる取り組みの中でより充実した学びにつながるものである。そこで今次研究では両教科の豊かな学びを以下のとおり定義した。

#### 図画工作・美術と技術科で共に願う豊かな学びの姿

「体験的な学習活動のなかで、表わしたいことや課題について創意工夫し評価・改善・表現（製作）しようとする姿」

### 2. 本年度の研究の視点

#### (1) 思考力・表現力・判断力を明らかにする

上記の豊かな学びの姿を具現化するために、特に小学校図画工作と中学校技術の学びの連結に視点を置き以下の取組みを進めることとする。

図画工作では主として工作の領域での体験的な造形活動の場における基本的な技能の習得や活用、そして探求（意欲）のあり方について検証する。一方技術では前述の小学校での学びを受けて、習得した知識や技能を基に仲間とのかかわり合いの中から課題解決のプロセス（探求）に向かう学びの姿を検証する。

#### ①図画工作・技術でともにのびたい力

一点目として図画工作と技術で共通する「学び」として、感覚を働かせて、手や指先を中心とし体全体を動かして体験的に学ぶこと、作業意図に応じて道具を活用すること、材料から見立てたり、製作意図に関わって材料を活用したりすることなどがあげられる。それは、造形遊びの中での体験活動に始まり、工作の内容を中心として発達段階に応じて系統的・発展的に培われる「ものづくり」に関わる知識と技術である。学習指導要領に示される材料や用具にその系統性が明示され、たとえば材料の取扱いについては、図画工作の第1学年及び第2学年では「木」が示され、技術の材料と加工（第1学年）で「木材・金属・プラスチック（等）」まで段階をたどることができる。

この知識と技術の「習得」に当たり、図画工作では表現したいことに向かう中で体験的に身体感覚を伴って習得していく。例えばのこぎりであれば、押す動作と引く動作では手応えが異なること、力任せでは効率よく切れないこと、切断面に垂直であるほど負担が軽くなること、リズムよくのこぎりをひくことで切る手応えとともに心地よさを感じるなどである。これは技術と感覚が密接につながっていることを現し、その伝達は言語だけで伝わるものではなく、時には手を取りながら伝達していくようなコミュニケーションスキルでもある。

二点目として、前述の基本的な技術や技能を活かし表現（製作）していくことにより、それぞれの教科の目標にせまる。図画工作・美術においては思いや願いを色や形に表わし、技術科では生活課題の解決をめざしたものづくりなどにつながる。

幼小中11年間の見通しの中で、子どもの学びをとらえ、それぞれの特性を生かしながら、豊かな体験

の上に立った確実な知識・技能の「習得」と「活用」について明らかにしていきたい。

- ・体験にもとづく基礎的な知識や技術を系統的・発展的に定着させていく力
- ・知識や技術を活用し表現し製作する力

## ②両教科における思考力・判断力・表現力とは

小中一貫教育の視点で両教科のねらいを勘案するとき、その教科の特性を生かし学習活動を展開する中で、子どもにつけさせたい力を端的に述べるとすればそれは「生きる力」という視点で。特に図画工作と技術においては「生きる力」をキーワードとして次の点を共通してとらえることができる。

- (i) 体験したことから感じ取ったこと（分かったこと）をもとに直感的にまたは熟考して表したいことや課題につなげていくこと
- (ii) 表したいことや課題について、構想を立てて実践し、個人や集団で評価したり改善したりすること
- (iii) 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させ、それらを活用しながら表したいことや課題に向かうこと

具体的には、(i) 美しいものにふれた時に直感的に美しいと感じたり、生活課題に接してどうすればいいかと考えること、(ii) その感動や思いを基底におき、試行錯誤を繰り返しながらつくりたいものの機能や色や形を創意工夫すること、(iii) つくる過程においてグループやクラスで考えを伝え合い、評価し合う中でよりよいものを生み出すことである。

これらの活動においては、その始めから終わりまで終始一貫して思考・判断・表現等は繰り返されていく。つまり (i) ~ (iii) の力はお互いにかかわり合いながら育成されていくものであり、今次研究においてはこれらのことを寄り合わせて思考力・判断力・表現力と考えたい。新学習指導要領に示されるようにその課程の一つ一つを整理して見つめ直し、子どもの学びの自覚をどのようにとらえ、どう生かしていくかを明らかにしたい。

## (2) かかわり合いの中で思考力・判断力・表現力をのばす

新指導要領で述べられる「言語活動」を通じて両教科の思考力・判断力・表現力の育成を考えたとき、図画工作では表現や鑑賞の学習活動の中で「見る」「聞く」「考える」「話す」力の基盤を言語活動を通して育成することであり、これは技術における課題解決的な学習場面での、生徒相互のかかわり合う力につながる資質や能力である。

さらに直接的な言語表現に限らず、ものや活動を通して伝え合うコミュニケーション、たとえば自分のもっているイメージを他者に伝える有効な手段は、先述の「のこぎり引き」の事例のように、体験を通して実感を伝える場合もある。今次研究においてはその体験による実感と言語表現が相互に補完し合うような展開を工夫したい。

(文責 後藤康太郎)